

週日(聖シモン 聖ユダの祝日)の説教

金 大烈 神父 2009年10月28日(水)

《多様性の中の一致・優先性・触れようとする心》

今日は三つのことについて皆様と分かち合いたいと思います。

ある人が食事の時にとてもおいしそうに唐辛子を食べています。本当においしそうに食べているので、その姿を見たもう一人の人が「辛いなの？」と聞きました。「全然、辛くないですよ。おいしいですよ。よかったら一ついかがですか。」と答え、そしてその言葉を信じて食べた人は、それは大変です。「こんなに辛いのにどうして辛くないと言うの。」と、まあこんな具合に。

私達は自分と違いのある人を受け入れ難いものです。ものすごく難しいのです。自分と感覚とか好みが違う、興味や趣味が違う人に対して距離感を感じてしまいます。そしてその人を認めるのが難しい。

唐辛子をおいしいと言って食べた人は楽しんだわけですが、もう一人の方はそれを食べたら救急車を呼ばなければ成らないほど大変な事になってしまう。ですから、それぞれの嗜好などによって人が区別されてはいけないことを、今日の福音(ルカ6・12-19)を通して考えなければならぬと思います。

皆様、何回も申し上げたのですが、12人の使徒達は色々な違いを持った人々でした。育った環境もそれぞれに違っていましたし、特に優れた人が一人もいなかった事が共通点で、皆、平凡な人達でした。その12人をイエス様が選ばれたのは、やはり福音は色々な“多様性”を、違いを抱きしめながらその中で“調和”させなければならぬことを意味していると思います。私達の共同体も同じことではないでしょうか。気が合わなかつたりする人々がいると思いますよ。私に対しても全然気の合わないタイプの神父だと言う人もいます。でもこれはしょうがないことです。しかし、この色々な違いをそのまま認めて、その中で“調和”を求めて行くことがなによりも必要な私達の態度ではないでしょうか。そのために必要なものは信仰です。“多様性”を、違いを、受け止められる唯一の力は、祈りと共に培っていく成熟された信仰でしょう。それがなかったら私達は、いつもぶつかりばかりになると思います。

12人の使徒達も、実際にイエス様の復活の体験をしてからも色々なぶつかりがありました。葛藤がありました。イエス様が、使徒達を選ぶときに一番いい方法は、自分の好みで福音的な教会建設に必要な頭の優れている者、そして人間的に能力の有る者を何人が選んで、行えば今よりもっとうまくいったかも知れませんが、しかし、何故あまり目立たない職業、知識の少ない者、自分の事しか考えないような利己的な人を12人選んだのでしょうか。それは、神様の国は例外なく全ての人々を差別なしに、色々な人々が“調和”されるその心を持って築かれる国だから、そのように選んだと私は思います。家族の内でも色々な違いはあります。全然気の合わない兄弟もいるし、親子の間でも合わない場合があります。どうします。そうしたら絆を捨てますか。とんでもないことでしょう。

結局、いろいろな違いの中で私達はうまく関わらなければなりません。神学の用語では“多様性”の中の“一致性”と言います。“多様性”を認めないことは、そして“一致”を避けることは誤魔化しです。それはもう一つの言葉、画一的なやり方です。画一と“一致”はどんな違いがありますか？画一的、画一性、聞いたことありますよね。それはどういうことですか。ユニホームを強調することと似ています。それは皆同じ服を着なければならぬ。皆同じ表情を持たなければならぬ。人々が錯覚している一つのこと、特に政治に関わる人たちが“一致”と言う言葉で、画一的なやり方をした

ことは、歴史の中で沢山あります。皆同じ髪の長さにしてほしい、皆同じ服を着てほしい、色の選びは冬には黒、夏は白、皆同じ方向へ歩かなければならないと言いながら。“統一”だ“一致”だと言いながら人々を洗脳した訳です。いいえ、そうではありません。カトリック的な“一致”や“統一”は“多様性”の中での“調和”です。それを“一致”と言います。今日、使徒達を選ばれたイエス様の心を見なが、私達の共同体で私と違いがあるから何となく憎んでいる人がいるのではないかと、拒んでいる人がいるのではないかと反省してみましょう。

二番目は12人の使徒達の中で同じ名前を持っている人がいましたね。今日の祝日の主人公は聖シモンと聖ユダです。このシモンはペトロと名付けられたシモンとは違うシモンです。そうでしょう。そしてユダはイエス様を裏切ったイスカリオテのユダとは違うヤコブの子ユダです。ただ名前が同じだけなのに、人々はあまりこの二人の名前を好まないし、洗礼名として貰おうとしません。なぜなら、一人はあまりにも優れたペトロ使徒だから、だいたいの方はシモンと言う名前を貰おうとしないでペトロにします。逆にイエス様を裏切ったイスカリオテのユダのために聖人使徒ユダの名前は人々が貰おうとしないのです。おもしろいでしょう。そして、実際、聖書の中でも今日のシモンとユダについてはあまり話されていないし、記されていないのです。どうしてでしょうか？ 彼らは使徒としてうまくいかなかったのでしょうか。業績がないからでしょうか。いいえ、そうではなく、ある意味で彼らは模範的な使徒としての生活をしたお二人様だと私は思います。

教会の仕事は、先ず神様を念頭に置かなければなりません。神様を思い考えなければならないのです。人間のことを、優先に考えると必ずぶつかりが生じます。このお二人様は陰のように活動しました。ある有名な小説に「あなたはいつも本物で私はいつも陰になるのが自分の宿命です」という言い方があったのですが、このお二人様は実際にイエス様の陰になろうとしたと思います。彼らは12人の使徒達の中で、一番静かに自分の名が知られる事や業績に囚われることなく、まじめに福音を述べ伝える事に頑張ってきたと思います。ですから聖書にさえ載る事がなかったのでしょうか。運が悪かったのでしょうか。イエス様を裏切った者と同じ名前によって、子孫達もこの名を模範として貰おうとしませんでした。この様な状況があるにもかかわらず、私達が聖シモンと聖ユダ使徒の特別な祝日として祝っているのは、隠れた意味があるからです。

皆様、このお二人様が見せて下さった信仰のように、私達も先ずイエス様を考えなければなりません。そうすれば自然と人間的にも実が結べることを信じて信仰の生活をしましょう。

最後に今日の福音(ルカ 6・12-19)の終わりに何が書かれていますか。『何とかしてイエスに触れようとした。』と書かれていますね。そうです。これが信仰です。皆様どのような気持で、どのような真摯な気持で、又、懇切な気持で、イエス様に触れようと努力したのでしょうか。これがなかったら、何とかして触れようとするその心がなかったら、私達は絶対信仰の味はわかりません。

ありがとうございました。